八王子便り（9）

お盆を過ぎたころから、小さな庭のあちこちに白百合が咲きはじめました。その多くはもう散りましたが、遅咲きの数本はまだ咲いています（右写真）。これらは植えたのでなく、数年前、どこからか種が飛んできて、わが家の庭に定着し、増えはじめたのです。

この種の百合の存在に最初に気づいたのは、8 年ほど前のこと。昨年の 9 月に 101 歳の生涯を閉じた母が、８年前に体調を崩し、群馬の実家から比較的近くの老人施設にお世話になり、週に一度、八王子から群馬まで見舞いに車を走らせていました。その途次、圏央道の青梅の先あたりで、道路脇の斜面のそこかしこに白百合が咲いていることに気づかされたのです。その後、安曇野で開かれる「夏の集い」に伺うときも、中央高速道の甲府を過ぎたあたりで、同じように道路脇の斜面に咲く白百合が目に留まりました。

子供のころ、野山でヤマユリやオニユリは見ていましたが、この百合の花のかたちは、どうみても、テッポウユリです。はじめは、日本にもテッポウユリの野生種があったのだな、くらいに思っていました。ところが、そのころから、私どもの住む団地にも、同じ種類の百合が姿を現わすようになりました。住宅の庭だけでなく、ちょっとした空き地にも、歩道と住宅敷地の間の土のないような狭いところにも、白い花を咲かせます。そして、ついにわが家の庭にも闖入してきたというわけです。闖入して、たしか、今年が４年目です。

花が咲き終わり、花弁が落ちると、めしべの部分が莢（さや）状に膨らみ、そのなかにたくさんの種ができます。秋が深まると、莢が枯れ、乾燥して開き、周りを薄紙のようにひらひらさせる小さな種が風に舞います。それまで、百合の種が風に舞うなどとは、思いもよらぬことでした。

調べてみますと、この百合の名前は「タカサゴユリ」。タカサゴ（「高砂」）は、先住民「高砂族」に残る台湾の古名で、台湾が原産地だといいます。日本には栽培種として 1920 年代後半に移入され、いまや、南は沖縄から北は宮城県あたりまで自生種として分布しているとのこと。かたや、テッポウユリは、ヨーロッパから移入された園芸種とばかり思っていましたが、こちらの原産地も南西諸島から九州南部。いまでは、タカサゴユリとの交雑種も各地にみられ、それをシンタカサゴユリと呼ぶのだそうです。

百合は北半球にひろく分布します。旧約聖書にも登場し、ヘブライ語ではショシャーン（女性形はショシャナー）。文豪バルザックが小説の題に採用した「谷間の百合」をはじめ、雅歌には、乙女の麗しさの比喩として「百合」が繰り返し用いられ（雅 2：1-2、4：5 ほか）、詩篇を朗唱する調べの一つも「百合」と名づけられています（詩 45：1、69：1 ほか）。

ショシャーンが「百合」と訳される理由は、それがヘブライ語で「６」を意味するシェシュに由来し、ユリ科を特徴づける 6 枚の花弁と一致するからです。エルサレム神殿の廊の柱頭も「百合」の花模様で飾られていました（王上 7：19）。イスラエルの高名な植物学者ゾハリによれば、「ばら」（雅 2：1「シャロンのばら」、イザ 35：1「野ば

ら」）と訳されてきたヘブライ語ハヴァツェレトも、「ばら」でなく、ショシャーンの別名であろうといいます（M. Zohary, Pflanzen der Bibel, 2. ed., 1986, p. 176）。

70 人訳聖書でもショシャーン/ショシャナーにクリノン（krínon）「百合」というギリシア語を充てられます（ラテン語は lilia）。このクリノンが「八王子便り（6）」でもふれた「野の花」（マタイ 6：28）の「花」にあたるギリシア語です。ですから、文語訳聖書などでこれが「野の百合」と訳されている理由もわかりますね。最近では、フランシスコ会訳聖書が「野のゆり」と訳しています。

では、聖書協会訳などで、クリノンが「百合」から「花」に代わったのはなぜでしょうか。詳しい経緯は承知しませんが、新約聖書の研究者たちが信頼するバウアー『新約聖書ギリシア語辞典』（英語版、1952 年）のクリノン（krínon）の項には、「百合」という訳語とともに、クロッカス、アネモネなどの意見が紹介され、「おそらくイエスは特定の花を指したのではなく、ガリラヤの野を飾るすべての花を念頭においていたのであろう」と記されています。

春先のガリラヤの野には様々な花が咲き乱れますが、白百合が咲く季節は夏です。カルメル山系には、今も、テッポウユリによく似た百合が自生しています（右写真）。学名は lilium candidum（candidum はラテン語で「白い」）、ヨーロッパの白百合と同じ種類です。

この白百合は別名 Madonna Lily といい、いつしか、聖母マリヤの「清らかさ」を象徴する花となりました。キリスト教絵画で白百合といえば、マリヤのアトリビュートです。アトリビュートとは、たとえば 12 使徒のペテロが「天国の鍵」を手にする姿で描かれるように、描かれる人物（あるいは神話上の存在）の特質を表す事物を指し、美術史では英語をそのまま使うようです。

いつから白百合がマリヤのアトリビュートとみなされたのか、詳細は調べていませんが、すでにゴシックの時代（14 世紀前半）の画家シモーネ・マルティーニの「受胎告知」に、マリヤの前におかれた花瓶に白百合が生けられています。ダ・ヴィンチやボッティチェリといったイタリア・ルネッサンスを代表する画家が残した「受胎告知」には、白百合を手にしてマリヤに「受胎」を告げる天使ガブリエルが描かれます（右はエル・グレコ「受胎告知」。天使ガブリエルの胸元に白百合が描かれる。大原美術館蔵）。

新約聖書時代のユダヤでは、マリヤという女性名がことのほか好まれたようです。イエスの母マリヤのほかに、マグダラのマリヤ（マコ 15：40 ほか）、マルタの姉妹（ルカ 10：39 ほか）、ヤコブとヨセの母（マコ 15：40 ほか）、ほかに二名の女性がマリヤと呼ばれています（使 12：12、ロマ 16：6）。

マリヤはモーセとアロンの姉妹と伝えられるミルヤム（Miryam, 出 15：20 ほか）のギリシア語音訳マリアム（Mariam）の語尾が脱落した形です。オリーブ山の中腹から

も、マリヤという名が刻まれた骨櫃（後 1 世紀）がいくつも発見されています。
　このように、マリヤは当時のごくふつうの女性名でした。後のキリスト教会で、マリヤが聖母として崇敬されるようになる理由は、いうまでもありません、マリヤがイエス・キリストの母だからです。マリヤ崇敬の背後に、当時の東地中海世界に広まっていた女神崇拝が一役果たした、と指摘する研究者もいます。2 世紀中ごろに作成されたらしい『ヤコブの原福音書』には、マリヤ自身の生誕が奇蹟的な出来事として語られ、「イエスの兄弟」（マルコ 3：31 ほか））をヨセフの先妻の子とするなど、マリヤの聖性がことさら強調されています。また、イエス・キリストが「子なる神」と信じられるのと並行して、マリヤはテオトコス（theotókos）「神を生んだ方」と呼ばれるようになります。後 431 年のエフェソス公会議で、これがマリヤの正式呼称と定められました。ハリストス教会はこれを「生神女（しょうしんじょ）」と訳しています。
　マリヤ崇敬は、今日なお、カトリック教会と東方正教会に引き継がれています。プロテスタント諸教派では、マリヤへの尊敬の念はあっても、崇敬までしないのがふつうです。マタイ福音書とルカ福音書のイエス生誕物語を別にすれば、マリヤは新約聖書にそれほどしげく言及されるわけではありません。しかし、マリヤに言及する箇所では、短かくとも、ふつうの母親として抱く種々の思いを想像させることが稀ではありませんね。母親を代表しているかのような趣です。かつて、ひと昔前のスペインでは、すべての女性が Maria と呼ばれた、と聞いたことがありますが、それも理解できるような気がします。

　以上、今回は百合の花とマリヤの話に終始しましたが、最後に、ご報告を二つ。
　まず、新型コロナ・ウィルス感染との関連で読んでみた二冊の読書の報告です。その一冊は、ここにきて、ふたたび脚光を浴びたカミュ『ペスト』（新潮文庫）。1940 年代、ペストが蔓延して、完全封鎖された北アフリカの港町オランで、医師リウーを中心に、様々な背景をもつ人たちがペストの猛威に立ち向かってゆく様子を描いた小説です。なかでも、神を信じない医師リウーの、ペストとの誠実な「戦い」ぶり、それに触発されてリウーともにペストとの戦いに挑み、友情を育む人たちの生きざまが、みごとに描き出されています。期せずして、不条理としか言いようのない情況下で神を信じるとはどのようなことなのかと、自らに問わないではいられませんでした。
　もう一冊は科学史家でカトリック信徒でもある村上陽一郎氏の『ペスト大流行』（岩波新書）。14 世紀にヨーロッパ全体を襲い、「黒死病」と呼ばれたペスト猖獗の実態や当時の人々によるペスト理解などを、当時の資料に基づき詳しく紹介しています。本書の初版は 1983 年ですが、ペスト感染の中国起源説、バッタ大発生との関連、疫病による社会的差別の発生など、現在の新型コロナ・ウィルス感染に伴う諸現象と重なる点が少なくないことに驚かされました。
　もう一つは、古代オリエント博物館主催の無料公開講演会開催のお知らせです。日時は 9 月 21 日（祝）13：30〜15：00、演題は「エヌマ・エリシュ―古代メソポタミアの天地創造神話とその現代性」。この間、翻訳に取り組んだバビロニアの創世神話『エヌマ・エリシュ』を紹介しながら、旧約聖書への影響も含め、神話のもつ意味をお話するつもりです。無料のオンライン講演会ですが、申し込みがないと、ご覧いただくことはできません。ご関心のおありの方は
https://aom20200921lecture.peatix.com/
をご覧くださり、申し込んでください。　　（2020.8. 26、月本昭男記）